【50】

氏　名（本籍）	長澤壮平（ながさわそうへい）（神奈川県）
学位の種類	博　　士（文　　学）
学位記番号	博　甲　第　4190　号
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	**岳神楽の象徴と現在的動態**

主　査	筑波大学教授	文学博士	山　中　　弘
副　査	筑波大学教授	博士（宗教学）	津　城　寛　文
副　査	筑波大学助教授	Ph. D.（宗教学）	木　村　武　史
副　査	筑波大学助教授	Dr. phil.（チベット学・仏教学）	小　野　　基

論文の内容の要旨

本論文は，岩手県に伝承される岳神楽を事例として，その象徴と現在的動態を明らかにしようとするものである。序論では，問題設定，方法論，先行研究，岳神楽の地理・歴史的背景と様式について検討した。岳神楽は中世から伝承される様式といった過去性をもちながら，現在上演され，文化資源として注目されるような現在性の両面を持つ。このように，歴史的でありつつも現在的であり，両者が切り結ぶところにある神楽のあり方を，柔軟に捉えることを目標とする。このため，本論文では，第 1 部の舞の意味と力と，そして第 2 部の人々の実践という大きく 2 つの側面からアプローチしている。第 1 部は，岳神楽の式舞六番を取り上げ，それらの意味と力を検討した。第 1 章では，式舞六番の最初の演目となる「鶏舞」を取り上げた。そこでは，空間的構造に厳密な「対の構造」が見出された。そして，この全体的構造は鶏舞の意味と結びついており，そこに「雌雄」「天地」「はじまり」などといった意味が見出された。他方，所作の次第には儀礼的な「採り物強化の反復構造」が析出され，鶏舞の構成におけるいわば骨格のあり方が示された。第 2 章「翁舞」では，翁という神に大日如来やアメノコヤネノミコトといった「最高神」の観念が確認された。その舞は基本的にやはり「採り物強化の反復構造」によって構成されており，さまざまな祓いや拝みを含むものであった。その表現における「優雅」「威厳」「強さ」といった質は，「至高」「天」といった翁の属性と結びつき力を与えると見られた。第 3 章「三番叟」では，三番叟が構造論的に翁の対極に位置するものとして捉えられ，その属性は「地」，「無秩序」として確認された。舞のあり方は非常に「見世物的」でありながら，そこには一貫した意味論が見出された。すなわち，三番叟は神でありながら人間と常に接触する「地」であり，人と神との境界領域に属する。このゆえに，客に向けられた「見世物」として表わされ，演者の練習にとっても神楽世界への入り口に位置している。第 4 章「八幡舞」では，八幡舞の全体的構造は鶏舞と同様の「対の構造」をもつが，それを構成する動きの方向には「方角性」という顕著な特徴が見出された。「方角性」は，八幡舞がもつ「地を定める」という宇宙論的意味と結びついていた。この意味が達成されるために，八幡舞は全体を通して数多くの「祓い」の所作が組み込まれている。そしてこの「祓い」の意味は，弓矢や強い踏み鳴らしを用いた激しい所作による「武力的な強力さ」の表現と結びついている。第 5 章「山の神舞」では，「恵みのもたらし」と「祈祷」の二つを目的とした次第の構造が見出された。その全体的構造は，所作の反復の

「減少構造」や「採り物強化の構造」といった儀礼的構造からなっていた。「恵みのもたらし」と「祈祷」という行為は，人に恵みをもたらす山の表象としての山の神の性格を表わす。そして，山の神舞の芸術形式的側面は「威厳」,「力強さ」といった質を表現し，人に対して行為する山の神の強力な性格と結びついていた。第6章「岩戸開き舞」では，その次第構造は「舞台画定」,「神話内容」,「アマテラス再臨」,「光の照射」,「鎮め」という意味の順序で展開する。この展開が最高潮に達したところで,「アマテラス再臨」の再現と「光の照射」が表現される。こうした展開の中で，芸術形式的側面は「神聖」「高貴」「優雅」「めでたさ」「祝い」を表わし，神話の意味を再活性化している。

第2部は，第1部の議論を踏まえながら，岳神楽をめぐる人々の実践のありようを探求した。第7章では，「民俗芸能」という象徴的概念および文化財制度といった社会的諸条件と，「民俗芸能」を実際に演じたり鑑賞したりする人々との相互作用という視座に立ち，岳神楽における実践の再生産のあり方を吟味した。はじめに「民俗芸能」が研究者によって構築された象徴的概念であること，およびこれが文化財行政と結びつきながら人々の実践のあり方を規定していくことが明らかになった。しかし演者たちは「民俗芸能」や制度の影響力を受容しながらも，自らが地元世界で培ってきた身体知を立脚点として「スピリチュアリティ」や「感じ取ること」といった実践の新たな意味を獲得したと考えられる。第8章では，「民俗芸能」を文化的資源と捉え，これが社会的にいかに機能するかを追究した。機能は配分，結合，伝達の側面から捉えたが，これを議論する際，とくに人々の体験を重視し，その体験の性質が神楽の機能と不可分であるという視角から論を進めた。地元コンテクストでは，「スピリチュアリティ」,「親密な結びつき」,「芸へのこだわり」などが，地元外では「スピリチュアリティ」といった言葉が，参与する人々の体験や関心を表わすものとして析出された。こうした諸性質は，身体資源としての神楽がもたらす「良き事」であり，人々を結びつけるものと考えられた。第9章では，上演の場における相互作用を，本論文の全体を踏まえながら総合的に考察した。上演の場を生じさせる条件は膨大だが，とくに当事者の「関心」を重視しつつ，重要と思われる諸条件を抜き出して，芸能の動態に特有の統合的性格の描出を試みた。まず，演者の身体，精神，上演の場の環境，観衆のまなざしなどが統合し,「演じられている形態」が立ち現れる。この「演じられている形態」を人々が体験し，神楽実践の持続へとつながる。そして,「演じられている形態」は,「主観的力動性のパターン」を表現，伝達する象徴であり，その伝達域は，過去の人々と現在の上演の場の人々とを含んでいるといえるのである。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，岩手県花巻市の早池峰山麓を拠点とする岳神楽の丹念な芸態的分析とその現在的実践に宗教学的視座から肉薄した非常に意欲的な論考だといえる。著者は民俗芸能が歴史的・民俗的背景をもちながらも，美術品などと異なって「行為される構造」として社会の現実の構築過程にかかわっているとする。しかし，その一方で，神楽の舞自体がもつ意味と力の自立性に光を当て，実際の上演の場面やその演者たちの意識にまで立ち入り,「人々の微細な実践のレベル」において，神楽の統合的理解を試みようとしている。以下，宗教学的視座からする本論の学問的貢献は次の三点にあると考えられる。

第一に，式舞六番におけるそれぞれの舞の連続する動作を細かいカットに分解した画像資料を使って再現し，それらをいくつかのコードに分類し，そこに認められる力と意味を抽出したことが挙げられる。さらに，一つの完結した舞のなかに,「段階的反復構造」,「採り物強化の反復構造」,「反復減少構造」といった一定の共通するパターンの存在を明らかにすることで，その他の神楽舞の芸態分析にも応用できる枠組みを示唆したことも特筆していいだろう。第二に，舞を通じて，演者たちと観客との間に生じる相互作用の検討に際して，身体資源という概念を巧みに使うことで,「威厳」,「力強さ」,「優雅」など，これまで分析の手続きにおいて主観的とされてきた「質」を表現する語彙を意識的に導入し，それを通じて神楽の舞自体に備わっ

ている「力」と「意味」を宗教学的に論じうるモデルを提供したことが挙げられる。そして第三に，神楽を演じる演者たち，それを見る観客たちに対するインテンシブな聞き取り調査によって，彼らの内面に生じている感情を抽出し，それらを神楽の実践の重要な問題として本格的に検討したことが挙げられる。これは，伝統的な民俗学的な神楽研究と近年の人類学的なそれのいずれの立場にも与せずに，岳神楽の実践における現在的宗教性のあり方を正面から論じる道を拓いており，著者の確かな学問的力量を感じさせるものといえよう。

以上のように本論文の成果は高く評価できるものであるが，若干の問題も残されている。例えば，本論文で使用されている諸概念（たとえば「主観的体験の力動性のパターン」）のなかには必ずしも十分に咀嚼されていないように感じられたものもあった。さらに，本論文が分析的に区別している「宗教」と「スピリチュアリティ」という二項対立は，舞そのもののもつ意味と力の基底にある伝統的民俗信仰から岳神楽の現在的動態を分析的に切り離すという点で有効であるにしても，その一義的な適用は，著者自身の理論的枠組みからの対象の一方的な裁断の危惧をいだかせなくもなかった。しかし，これらの問題は著者の本論文での優れた学問的貢献を何ら減ずるものではない。本論文は，宗教学的視点から，岳神楽の式舞六番の意味と力の解明とその実践における相互作用を明らかにすることで神楽研究の新たな地平を切り開くものであり，この領域における著者の学問的貢献は特筆すべきものがある。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。